

# Project-Based Learning による図書館資料展示会への取り組み

## From planning to implementation of material-exhibition as Project-Based Learning

横谷 弘美\*

大手前大学総合文化学部\*

大手前大学図書館学課程では、ドキュメンタリー映画『疎開した 40 万冊の図書』（2013）を題材とし、文化的資産というべき図書等を保存し継承していくことの大切さや社会にとっての図書館の存在意義と使命を学ぶ機会を創出するにあたり、その映画の上映会に関連した活動を有志学生による Project-Based Learning (PBL) として取り組むことを試みた。主には、上映会の実施にあわせて図書館資料を用いた特集展示を有志学生の手で行うことを提案し、司書資格取得をめざす学生に呼びかけた。本稿では、イベントに連動した図書館資料展示会の意義、PBL として取り組む目的、学生による取り組み過程とその成果について報告する。

キーワード： Project-Based Learning、図書館資料展示会、社会人基礎力

### 1. はじめに

大手前大学図書館学課程では、2014年度教育研究課題として「ドキュメンタリー映画『疎開した40万冊の図書』上映会およびミニ講演会の開催とリベラルアーツ型学習の展開」に取り組んだ。

金高謙二監督によるドキュメンタリー映画『疎開した40万冊の図書』（2013）は、第二次世界大戦下東京都での大規模な図書の疎開事業、イラク戦争下で軍事施設と化した図書館の資料を運び出して焼失から守った司書の活動、そして東日本大震災被災地における図書館活動を織り交ぜて、かけがえのないものを守ろうとした人々の活動を描いた記録映画である。この映画を題材として、文化的資産ともいうべき図書等を保存し継承していくことの大切さ、社会にとっての図書館の存在意義と使命を学ぶ機会とし、さらに本学の掲げるリベラルアーツ型教育、複合的領域の学習へ展開させることを検討した。上映会の実施や図書館に関わる学びだけにとどめず、映画の主題に関わる学問領域での学びのきっかけとしたい、そしてそれらの領域に関心を持つ学生や教員等にも働きかけ幅広く学びのきっかけを波及させることが、本学での上映会の効果を最大限に引き出すことだと考えたからである。

そのために、講演会や図書館資料展示会を上映会に

連動させることとした。また、そうしたイベントに関係する活動への参画を通じて学生の学びを深めることを考え、Project-Based Learning（以下PBL）を試みることとした。本稿では、上映会に関連した内容での資料展示会の取り組みに関して報告する。

### 2. 図書館資料展示会の計画

#### 2.1. 資料展示会の意義

図書館での資料展示会活動は、一般的に図書館の主要な事業として位置づけられるものではないが、貴重書をはじめ図書館の所蔵資料を紹介するもの、メモリアル・セレモニーとして企画されるもの等、館種を問わず多くの図書館で取り組まれている。特に大学図書館では、館内に展示して資料への関心を高め利用促進を図る場合、図書館の入り口や外面に向けて展示して入館利用を促す等広報の一環とする場合、あるいはまた学外への資料公開・地域への貢献を目的とする場合等がある。それらの意義は広報活動あるいは（学習支援を含む）啓蒙的活動としてとらえられる。米澤（2005）はこれらに加え、図書館員の能力を向上させる「人材育成活動としての図書館展示」の意義も挙げている。

また、図書館による資料展示会とは趣旨が異なるが、大学における司書養成課程での取り組みに、学生が図

書館資料紹介ツールを作成し成果を発表・展示するといった実践報告例<sup>2)</sup>がある。これらにおいては、資料の解題やツールとしての選定等の図書館実務に即した実践的な課題に学生が取り組む意義だけでなく、資料の紹介が他の学生の図書館利用促進や学習環境の改善にもつながることに言及されている。

## 2.2. 資料展示会の目的と計画

今回の取り組みは、「文化と戦争」等をテーマとした学習の展開を図る仕掛けの一つとして検討を始めた。文学、絵画、音楽、映画等において戦争が描写と考察の対象となり、さまざまな形で人々の注目を集めることも多い一方で、日本の特に若い世代においては関心や理解が薄いことが度々指摘されるためでもあり、映画を起点にさまざまな方向へ展開しうるためである。

また、展示の企画を図書館司書に依頼するのではなく、司書資格取得をめざす学生によるPBLとして取り組むこととした。図書館では、事業としての位置づけや規模・頻度等にもよるが、展示会担当の専任者がおかれることは稀である。プロジェクトで取り込まれる実務はまさにPBLの題材にうってつけである。

そして、大手前大学・大手前短期大学図書館（以下、本学図書館）では、図書館内外のイベントと連動させた資料展示会（以下、本学図書館での呼称に従い特集展示とする）や、初年次～2年次のコア教育科目にあわせた特集展示、図書館が独自にテーマを設定しての特集展示が頻繁に組まれている。学生・教職員がおすすめの一冊をコメントと共に紹介する資料展示「一期一会」コーナー、授業や学生の諸活動の支援として作品展示等へのスペース提供も行われている。そのため、特集展示を学生有志で行う下地が十分に整っていると考えられた。

そこで、以下の目的のもとに上映会に連動させた特集展示への取り組みを計画した。

- a. 上映会広報活動の一環として、上映会場があるメディアライブラリーCELL（図書館）において、上映会実施を継続的に告知する
- b. 上映作品で取り扱われるテーマやエピソードについて事前学習を深める。上映作品に関連した何らかのメッセージを発信することで、事前学習あるいは関連した学習への波及のきっかけを他の学生やその他の来館者にも提供する
- c. 司書が日頃取り組んでいる業務について、学生が体験する等して理解を深める機会とする。また、

それを通じて社会人基礎力の伸長を図る。

これらはいずれも、先述した図書館における展示会活動の意義に合致するものといえる。今回は特に人材育成における意義に着目し、図書館実務のごく一部分ということにはなるが、学生が実際に体験すると共に、司書はいかに実務を通じて知識やスキルの向上を図るかということを知る機会として考えた。準備期間は約1か月半程、展示期間を約2週間程と予定とした。

## 3. 活動の経緯

### 3.1. プロジェクト・メンバーの募集とグループ編成

プロジェクト・メンバーの募集は、司書資格取得をめざし基礎的知識を学習済みの2年生以上を対象とした。また、この取り組みが実務に即したプロジェクト体験の機会であることを意識的に語りかけた。

組織形態は、4～5名程のグループ単位が活動しやすいだろうと考えていたが、7名（2年生1名、3年生5名、4年生1名）の学生が集まったので、7名を1グループとしてスタートすることになった。学年をまたがって参加者を得たことは、学生同士の交流という面からも喜ばしいことであったが、反面、授業の空き時間帯に全員が集まっただけの活動時間を確保することが困難であった。打ち合わせに関しては、昼休みにランチミーティングの形で週1回集まることしかできないと判明し、その後の取り組みにおいてもこの点は苦慮することとなった。

### 3.2. 事前検討課題

集まったメンバーは司書資格取得という同じ目的をもつもの同士とはいえ、時間的制約から、相互に打ち解けて主体的に検討を重ねるといった活動が引き出されるまで十分時間をとることが難しいと判断したため、第1回ミーティングの前に各自で特集展示における仮テーマ案を1つ以上考え、展示資料候補として推薦するものを1点以上見つけておくことを求めた。

### 3.3. 討議と学習

第1回目のミーティングでは、「映画上映会に関連した図書館資料を展示する」だけでなく、「上映会開催のPRをバックアップするとともに、イベントのテーマに関連したなんらかのメッセージを図書館利用者へ発信する機会とする」ことを改めて説明し、特集展示のテーマを検討した。展示計画の前提については、学生、教職員、その他の来館者、映画上映会当日の来場者をターゲットにし、展示スペースは長机2本分程度、映画

上映会の1週間前から上映会当日までをコア期間として約2週間程の展示期間を想定するものとした。映画上映会および特集展示に関する広報活動については、メンバーが関与可能な形、範囲に一定の示唆をした。

テーマに関するメンバーの討議は、あらかじめ各自が考えてきたテーマ案と展示資料候補についてそれぞれ付箋紙に書き出して模造紙の上に並べ、グルーピングを検討したりテーマに関するキーワードの提案を行ったりする作業を、KJ法とブレインストーミングの要領で進めた。大きく分けると、図書館や図書に関するテーマ案と戦争に関するテーマ案が多数を占め、最終的にメンバー各自の提案は以下に集約された。(図1)

1. 映画内容、取り上げられた題材を紹介する
2. 守られる対象としての資料・文化について
3. 背景となる時代や状況について (戦争、東日本大震災に関する資料)
4. 舞台としての図書館について

そこで、次回以降のミーティングに向けて、討議過程で推薦された展示資料候補をリスト化して、さらに追加すべき資料を募ることとした。また、自分が担当したいテーマを検討することとした。当該映画に関しては、司書関連科目の授業内で紹介してあったが、映画パンフレットより抜粋した内容を参考資料として追加提供し、テーマを掘り下げるための材料とした。

これ以降、ミーティングでテーマを検討してから改めて展示資料候補を考えたことで視野が広がった、司書をめざす学生以外に一般的な人も対象と想定した資料選定を行えた、との声がメンバーから聞かれた。ま

<p><b>1. 映画内容、取り上げられた題材を紹介する</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・監督著書</li> <li>・映画パンフレット</li> <li>・同じ題材／エピソードを扱った資料</li> </ul>	<p><b>2. 守られる対象としての資料(本)・文化について</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・文化や資料保存について</li> <li>・一般的な図書館資料</li> <li>・読書の自由に関する資料</li> <li>・本を題材にした小説</li> </ul>
<p><b>3. 背景となる時代や状況について</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・戦争の歴史</li> <li>・戦争にまつわる様々な資料</li> <li>・海外の戦争に関する資料</li> <li>・太平洋戦争についての資料</li> <li>・東日本大震災に関する資料</li> </ul>	<p><b>4. 舞台としての図書館について</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・図書館という場所を知ってもらう</li> <li>・図書館を題材にした小説／図書館が舞台となっている作品や写真集</li> <li>・戦後の図書館</li> <li>・現在の図書館の課題と私たちにできること</li> </ul>

図1 展示テーマ案の集約結果

た各自が思い思いに、例えば自身が受講している専門教育科目(メジャー)での学習内容等も参考にしながらそれぞれに検討を深めたようであった。Self-Directed Learningを特に意識した働きかけを行ったわけではなかったが、プロジェクトに自主的に参加していることによる意識の高さが、そうした学習姿勢を自然と引き出したといえるのではないだろうか。

### 3.4. 分担

第2回ミーティングでは担当希望を確認して、分担を検討した。先述の1～4のテーマ(大テーマ)は当初提案されたテーマ(小テーマ)を集約しグルーピングしたものであり、大まかな枠組みはそのまま活かすこととして、担当者を調整した。小テーマごとに担当希望者が1名の場合はその者を責任者として、希望者が複数名いればその中から責任者を決定した。担当者といっても、複数のテーマを掛け持ちする形で相互に関わり合う可能性もあり、展示資料の選定や紹介文の作成等は担当に関わらず自由に参画できるものとしつつ、その取りまとめや調整のために担当責任者を決定したものである。

### 3.5. 展示資料の選定、展示用ツールの作成

第2回ミーティングまでに推薦された展示候補資料は当初の想定よりも多く、80点を超えた。推薦された展示候補資料と最終的に展示した資料(Appendix 1)の大まかな分野別内訳について、日本十進分類法第1次区分表(類目表)に従い図2に示す(本学図書館での

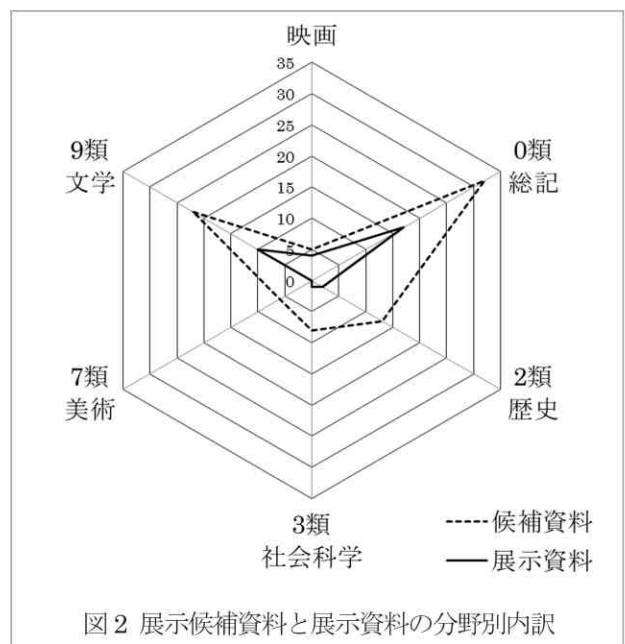


図2 展示候補資料と展示資料の分野別内訳



分類による。映画作品については主題によらず項目「映画」として集計している)。図書館関連分野の属する0類に次いで、9類に分類される資料が多いのは、小テーマに図書館を題材にした小説や作品というのが当初から挙げられており推薦された資料が多いことによるが、メンバーの「読書好き」「文学好き」な面があらわれたようでもある。

このように、ある主題に関連した資料は探せば多く見つかるものであるが、それらを漫然と並べただけでは先述の目的を達して「イベントのテーマに関連したなんらかのメッセージを図書館利用者へ発信する」とは言い難い。そこで、展示する資料を選定し紹介文を作成していく段階では、いくつかのルールを決めた。

まず、当然のことながら資料の選定や紹介文の内容に責任をもって取り組むために、必ず資料現物を十分に確認した上で誰がどの資料を選定し担当するのかを表明することとした。集められた資料を俯瞰して次のステップに進むことを意識して、各自が空き時間に図書館へ立ち寄って資料現物の確認や検討を行った。各自が展示を通じて発信しようとしているメッセージをより明確にするために、手始めにコアとなる数冊を選んで紹介文を考え、それを中心として展示資料の追加変更を検討するという進め方も推奨した。

自分が推薦した資料に紹介文をつけるというメンバーがやはり多かったが、他のメンバーによって推薦された資料の紹介に取り組むケースもあり、互いに刺激を与え合っていること、特定の資料にこだわるよりもテーマや展示としての構成を意識して取り組んでいることがみてとれた。

次に、各担当者は展示用ツールとして資料紹介POP<sup>3)</sup>を作成した。それまでに本学図書館で行われてきた特集展示では、B7サイズ用紙に書誌的事項と紹介文を記したPOPカードを作成して展示資料に付す形式でほぼ

統一されており、そのスタイルに倣い作成したものである。書誌的事項としてタイトルと責任表示の記載は必須とする以外は、デザインは自由、手書きも可としたが、結果的にはメンバー全員がパソコンでの作業を選び、POPカードを作成した(その一例を、作成者の承諾を得て図3として掲載する)。

資料配置構成の検討は小テーマごとに話し合って自由に工夫することとしたが、資料がテーマにそってあるグループを形成する場合、その意図を明らかにするために「見出し」を付けることとした。「見出し」については、紹介文のPOPと同じ大きさのカードにアイコン様の画像(大テーマごとに色違いのもの)を共通して用いるという形式的な共通点をもたせることとして、責任者が担当者間の調整とりまとめ役となり作成した。

### 3.6. 他組織との連携による広報

大手前大学では学生のさまざまな活動の様子をウェブ媒体で発信しており、本学図書館においても、図書館としての利用に限らず各種活動のスペースとしてメディアライブラリーCELLを利用する学生の支援を日頃より行っている。ウェブ媒体での情報掲載については、本学図書館が管理もしくは投稿権限を有する公式ウェブサイト、大手前大学学生広報スタッフチームVoiceのブログを対象に取材依頼を申し入れ、展示準備と並行して進行させた。

しかし、学生の広報スタッフチームVoiceのブログについては、先方の事情より取材記事が掲載に至らなかった旨の報告を後日受けた。残念なことではあったが、このことにより折衝を担当したメンバーは他組織との連携の難しさを実感したようである。先方に委ねざるを得ずうまくいかない部分も出てくること、そうした場合にどう対処すべきかといったことを体験し、ミーティングの機会に他のメンバーとも共有することができた。

### 3.7. 展示設営

特集展示の設営作業は、展示期間の開始に前もって行う案も検討したがメンバーのスケジュール調整が難

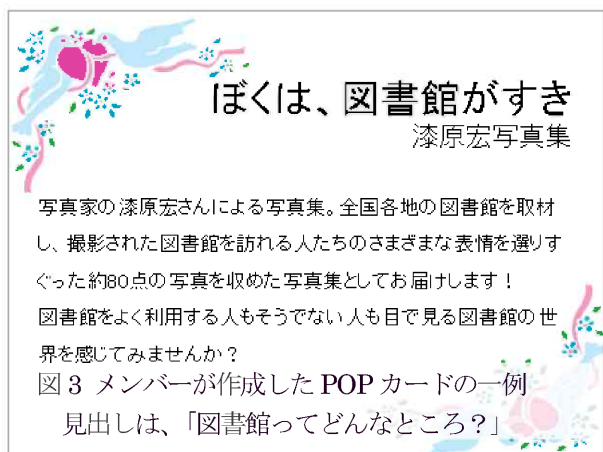


図3 メンバーが作成したPOPカードの一例  
見出しは、「図書館ってどんなところ？」



写真1 展示設営の様子

しく、部分的であっても全員が参加できる展示期間の初日に行くこととなった。図書館司書より留意すべき点等の示唆も受けながら、そして授業の空き時間を利用して作業を引き継ぎながらの設営となったが、メンバーが協力しあい、約半日で最終形に近いものとすることができた。展示された資料は、図書館所蔵資料 33 点に個人所有資料 3 点を加えた 36 点となった (Appendix 1 に一覧を示す)。

なお、上映会開催の広報を兼ねたイベントとしての認知を図るためのポスター制作については、上映会当日までに制作をかってでたメンバーが複数名あり、特集展示のメッセージ性を重視したポスターが完成したため、展示開始後になったがポスター掲示を追加して展示を完成することができた (写真 1)。

また、本学図書館ではウェブサービス「ブクログ」を利用して、特集展示の内容をウェブ上の仮想的な本棚に再現して提示する<sup>4)</sup>という試みを行っており、今回の特集展示についても同様に仮想的な本棚が作成され紹介文付きで公開された (ただし、この作業については、アカウント管理の都合上メンバーではなく管理者側で代行した)。

### 3.8. 展示撤収作業

所蔵資料の管理データ等の事務処理面については業務システムを学生が操作するわけにもいかないため、展示設営時には教員から説明するに留まった。例えば所蔵資料を通常の配架場所から特集展示スペースへ移してあることがオンライン目録 (OPAC) でもわかるようにしておく、そして事後には素早く元に戻せるようにしておくなど工夫されている点がいくつもある。

そこで、展示撤収作業時には単に展示スペースの片づけということだけではなく、あわせて図書館業務の一端を知る／考える機会となるようにした。利用者としては気が付きにくいような点もあるため、教員がいくらかの解説をした上で、資料を効率よく元の書架に戻すにはどう準備すればよいか、業務システムでの後処理もしやすくするためには本学図書館の司書にどのような形で資料を引き渡すべきか、複数人での作業はどのように効率化できるかといった点をメンバーが考えながら行った。資料のチェック作業で通常は業務システムを利用して行う工程も、学生が利用できる OPAC で代替可能な部分を工夫するなどして、わずかな体験ではあるが疑似的に試みた。また、ミーティングとして取り組み全体を通した気づきについての振り返りを行った。

振り返りを行った。

### 3.9. 記録資料の作成

最後に、記録資料の作成を行った。本学図書館による特集展示では、展示用ツール類を二次利用して特集展示の内容をまとめたファイルを作成し、閲覧に供していることに倣ったもので、日を改めてメンバーが集まり記録資料としての構成の検討等を行った。POP カード・ポスター類をバインダーにまとめ表紙を付すに際し、表紙部分は展示用ツールの二次利用ではなく新規に制作するとの提案があり、メンバーが協力しあって完成させた。最終的に本学図書館に記録資料を納めた際、このことをメンバーからのメッセージとともにウェブ広報媒体に取り上げていただき、これまでの特集展示の記録資料についての PR にも一役買うことができた。

## 4. 評価と考察

### 4.1. 大学内外からの反応

特集展示の内容面については、本学図書館の司書から、展示資料紹介文の完成度やメンバーの取り組み姿勢を「想定以上」とする評価を受けた。実務に即した PBL であるだけに、実務家からのこの評価はメンバーにも強く響いただろう。また、本学図書館より、展示スペースの提供期間に関して当初の予定を延長して夏休み期間終了までとする提案をいただき、より多くの来館者に学生の活動成果を提示することができた。

本学図書館に入っすぐの目につく場所に特集展示スペースを設けられたこともあり、実際に展示資料の館内利用 (閲覧) または館外貸出も好調だった。来館者に映画上映会を PR し参加を呼びかけるだけでなく、授業での上映会連動の動きや、資料活用など他の要素に結び付く展開もいくらか媒介することとなった。

また、上映会の対象を本学内だけではなく近隣の学生・市民に広げていたこともあり、上映会の前後には学外者、図書館関係者等からも関心を寄せていただいた。先述のウェブ媒体での情報発信から知っていただくケースのほかにも、映画上映会実施の PR にあわせて特集展示の紹介を行い、興味深い取り組みであるという反応が寄せられた。

### 4.2. 学習活動としての評価

3 章に述べたように、特集展示を実現させるにあたってメンバーたちは各自の提案内容や全員での検討作業に刺激を受け、あるいは他の展示例等もよく観察し

て学び、プロジェクトを遂行した。内容面では、テーマや展示資料候補の提案、展示用ツールの準備という形でアウトプットがマイルストーンとしてあったとはいえ、質や量にクリアしなければならない外的な基準があったわけではなく各自の内的基準にゆだねられていた。そのため、学習についてあえて負荷をかけるような指示もしていないが、3.3に述べたように各自が思い思いに展開をはかっていった様子があったことは印象的であった。

今回は短期間での計画となり、また集合しての活動が週1回のランチミーティングという形になったことで、共同での検討・調整に割ける時間が短かった。そのことで、特に活動初期においてプロジェクト・メンバーとしての関係性構築や自主性の発現等がスムーズにいかなかった可能性は多少なりともあり、反省すべき点であった。そうしたことも含めて授業をベースにした正課活動の中で取り組むべきではなかったかという考えが常にあったが、単位や成績評価に結び付かない活動であったために、むしろ良い形で自主的な行動がみられたと考えている。本学図書館司書より「授業での取り組みであれば『成績評価のために』』といった『やらされ感』がでてくることがあるが、今回は自主的に集まった学生たちだからか、『やらされ感』がなくしっかりと取り組んで作り上げている」との評価を受けたことが、それを裏付けているともいえる。

#### 4.3. 社会人基礎力との関連

大手前大学では、C-PLATS という「問題解決のために必要な三つの能力基盤と10のコンピテンシー」（芦原 2014）を定義し、経済産業省の提唱する社会人基礎力に対応させている。今回は短期間の取り組みであったので、授業（15コマ）を通じて行うのと同じ手法でC-PLATS 達成レベルを数値化することが妥当とは考えにくい。そのため、その伸長を可視化する試みは行っていないが、以下に各コンピテンシー（下線部）との関連をあげ、変化の見られた要素について述べる。

米澤（2005）は、図書館で展示を実施するプロセスは、担当する職員にとって「資料調査力の育成」「企画力の育成」「資料知識の習得」「解説力の育成」の効果があり、「職業人としての資質向上」につながるとしている。このうち、企画力についてはいうまでもなくコンピテンシーの総合的な働きを要する。資料調査力と資料知識は司書の専門性そのものということができるが、習得には分析力や論理的思考力、行動力といった

コンピテンシーが必要である。解説力は、展示資料に関する情報を適切な分量でわかりやすい展示解説として作成することで磨かれ、文章表現技能を育てる。その内容面は司書の専門性と密接な関わりがあるものの、コンピテンシーとしてのベースは分析力や論理的思考力にある。また、POPはそのルーツが広告にあるように、展示POPも情報伝達のみならずある種のメッセージを込めて行動促進を意図した静的プレゼンテーションであり、プレゼンテーション力を涵養する。

今回、先述のような評価を受けたことについては、元々レベルの高いメンバーが集まったことによるところもあると考えられ、必ずしも活動の前後でコンピテンシーの伸長があったと意味づけることはできない。ただ、活動の経過においては徐々に、そして相互作用的に力をまして現れてきたといえる。このことは、活動開始当初より、いわゆるプロジェクト・マネージャーの役割を担うメンバーがなく、活動の推進を教員が補助する部分があったこととも関係していると考えられる。あえてマネージャーを決めるよう強制しなかったことは、プロジェクトとしては重要な要素を欠くことになったといえるが、課せられての取り組みとなるとある種の不均衡が生じがちである点を懸念したためである。しかし、活動計画がある程度具体化して以降は、局面毎にリーダーシップを発揮するメンバーが入れ替わりながらも協同して推進する姿がみられた。

自発的なアクションにつれ、責任をもって引き受ける姿勢や、より創造力が発揮されるべきポスター制作等への取り組みも引き出されてきたようである。ポスター制作の着手遅れにみられるような計画力や行動力に関わる問題点については、「業務であれば、苦手な作業であっても避けたり後回しにはできない」という気付きが、メンバーからのコメントにおいて確認された。また、最終段階で本学図書館へ記録資料を納める際には、調整役のメンバーから「立ち合いは任意参加」との呼び掛けであったが、全員が揃って行ったということであった。

#### 5. おわりに

本稿では、実務に即したPBLとしての図書館資料展示会実施という取り組みに関して、急拵えのチームとしては周囲の想定を上回る成果が認められたことを報告した。学生の中から自主的にこうした活動に取り組もうという動きがあれば、学生の力だけでも学内の協力を得て実行可能であり、教職員が企画を用意する必



要性は低いといえるが、学習機会創出の一つの形としてはよい試みになったものと考えている。

司書養成課程に設定された演習科目では、図書館実務のうち特に重要な要素を実践的に学ぶことになっているが、できることならばより多くの知識やスキルを修得しつつ司書をめざしてもらいたいということから、実務に即した問題解決力を身に付けるような取り組みをもっと広げていきたいと考えている。また、卒業後のキャリアプラン等を考える一助となるようにも図っていききたいと考えている。本学図書館では、現在は図書館業務に関わる学生アルバイトやボランティアの活用、インターンシップの受入を行っていないが、近年、大学図書館が学生を積極的に巻き込んで各種企画をおこなっている事例<sup>5)</sup>も少なからずあり、司書をめざす学生の能力伸長や人材育成をはかることを目的にしているケースでは類似性が指摘できる。小規模なものとはいえ実務に即したこの PBL を成功裏に終えたことを手がかりに、学内外での体験を通じて学びを深めることの可能性を今後も探っていききたい。

### 謝辞

本稿は、大手前大学の 2014 年度特別教育研究課題に採択された「ドキュメンタリー映画『疎開した 40 万冊の図書』上映会およびミニ講演会の開催とリベラルアーツ型学習の展開」(代表者：前川和子)の一部についての報告である。一連の活動は、有志学生一同の尽力に加え、本学図書館をはじめとした学内各部署、教職員のみならずの多大なる協力支援のもとに実施されたことをここに記し、あらためて深く感謝申し上げます。

### 注

1) 博物館法では博物館における専門的職員である学芸員が展示および関連する事業についての専門的事項をつかさどると規定されている(第 4 条)ことに対して、図書館法においては展示に関する事業の位置づけは明確にされていない。

2) 取り組みの一例として、次のものがある。

桂まに子(2013)情報サービス演習と「レファレンス POP」：発信型情報サービス向上の一助となる新ツールの開発. 京都女子大学図書館情報学研究紀要 003, 15-27.

笹倉剛(2013)『読書紹介カード事例集 I』神戸っ子出

版, 神戸.

3) POP (Point of purchase advertising) は、小売店が商品の説明を補助するための広告ツールであるが、近ごろでは書店で手書きの POP を添えて本を紹介している光景が馴染みのものとなり、図書館での資料展示等にも広く取り入れられるようになってきている。

4) ブクログの本棚に表示できない資料もある等の制約のため、特集展示内容をすべて再現したものとはなっておらず、あくまでも抜粋版である。

大手前大学 メディアライブラリーCELL「大手前大学メディアライブラリーCELL の特集」ブクログ. <http://booklog.jp/users/otemaecell> (2014-9-1 最終確認)

5) 次の資料に近年の各種事例が紹介されている。

私立大学図書館協会 東地区部会研究部 パブリック・サービス研究分科会(2014)『はじめてみよう! 図書館サービス・スタートブック』私立大学図書館協会.

### 参考文献

芦原直哉(2014) PBL+SDL 型学修による C-PLATS 能力開発と eポートフォリオの活用：大手前大学、大学教育と情報 2013 年度 4, 10-13.

米澤誠(2005) 広報としての図書館展示の意義と効果的な実践方法. 情報の科学と技術 55(7), 305-309.

### SUMMARY

Librarian course of Otemae University planned to learn about importance to preserve and inherit books as cultural property, meaning of libraries' existence and mission of them from a documentary film "Sokai Shita 40-man Satsu no Tosho" (400,000 books evacuated during the war). A few activities related the screening were planned as Project-Based Learning, and I suggested about material-exhibition to students of librarian course.

I report about meaning of event linkage exhibition in library, purpose of that as Project-Based Learning, process of students' activities and result of that.

KEYWORDS: Project-Based Learning, material-exhibition in library, basic competency for working member of society

## Appendix 1 展示資料一覧 (大手前大学・大手前短期大学図書館所蔵資料 33 点、個人所有資料 3 点)

タイトル/著者	所在記号
疎開した四〇万冊の図書 / 金高 謙二	016.213  カネ
ドキュメンタリー映画 疎開した 40 万冊の図書 / 文化映画を守る映画製作委員会	016.213  ソカ※
3万冊の本を救ったアリーヤさんの大作戦：図書館員の本当のお話 / マーク・アラン スタマティー	〈個人所有資料〉
バスラの図書館員：イラクで本当にあった話 / ジャンネット・ウィンター	〈個人所有資料〉
ほんとうにあったお話：読む知る話す；5 年生 / 笠原良郎, 浅川陽子(監修)	916  ホン※
東日本大震災と図書館 / 国立国会図書館関西館図書館協力課(編)	010.21  ヒカ
東日本大震災に学ぶ / 日本図書館協会(編)	012  ヒカ
図書館戦争 / 有川 浩	文庫  913.6  アリ
図書館戦争 / 有川 浩	913.6  アヒ  1
図書館革命 / 有川 浩	913.6  アヒ  4
図書館危機 / 有川 浩	913.6  アヒ  3
図書館内乱 / 有川 浩	913.6  アヒ  2
図書館戦争 (DVD) / 佐藤信介(監督)	MOVIE  トシ
ふしぎな図書館 / 村上春樹(文) 佐々木マキ(絵)	913.6  MUH
図書館の神様 / 瀬尾まいこ	913.6  SEM
刑務所図書館の人びと：ハーバードを出て司書になった男の日記 / アヴィ・スタインバーグ	936  スタ
ぼくは、図書館がすき：漆原宏写真集 / 漆原 宏	016.21  ウル
図書館で出会える 100 冊 / 田中 共子	新書  019.5  タキ
図書館へ行こう / 田中 共子	新書  015  タナ
図書館であそぼう：知的発見のすすめ / 辻 由美	新書  010.4  ツシ
図書館を演出する：今、求められるアイデアと実践 / 尼川 ゆら	012  トシ
図書館ボランティア / 図書館ボランティア研究会(編)	015  トホ
図書館は、国境をこえる：国際協力 NGO30 年の軌跡 / シャンティ国際ボランティア会(編)	016.28  トシ
図書館のこと、保存のこと / 竹内 恵	014.6  タマ  5
図書館の第三の時代：ニュー・ライブラリアンのために / 片桐薫	010.2  カカ
「読む自由」と図書館活動：読書社会をめざして / 日本図書館協会図書館の自由に関する調査委員会(編)	010.1  トシ  11
子どもの権利と読む自由 / 日本図書館協会図書館の自由に関する調査委員会(編)	010.1  トシ  13
入門太平洋戦争 (洋泉社 mook)	210.75  ニユ
1941 年 12 月 8 日：アジア太平洋戦争はなぜ起ったか / 江口 圭一	新書  210.7  エク
略奪した文化：戦争と図書 / 松本 剛	020.2  マツ
日本軍接収図書：中国占領地で接収した図書の行方 / 梶谷 純一	020.22  トモ
東京大空襲・戦災誌：空襲下の都民生活に関する記録集；第 5 巻 / 『東京大空襲・戦災誌』編集委員会(編)	391.2  トタ  5
アンネの日記 / アンネ・フランク	949.35  FUA
戦場のピアニスト (DVD) / ロマン・ポランスキー(監督)	MOVIE  セン
大列車作戦 (DVD) / ジョン・フランケンハイマー(監督)	〈個人所有資料〉※
Blood diamond (DVD) / エドワード・ズウィック(監督)	MOVIE  フラ

※ 今回の展示会をきっかけとして、本学図書館の所蔵に加えられた。